科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成　２６　年　　６　月　１１　日現在

機関番号：　３２１０１
研究種目：　基盤研究(C)
研究期間：　2011～2013
課題番号：　２３５９３３２５

研究課題名（和文）第２子妊娠中の母親を対象とした第１子理解のための子育てクラスの有効性の検討

研究課題名（英文）A study on the effectiveness of a nursing program for mothers expecting a second child

研究代表者
礒山　あけみ（ISOYAMA, AKEMI）

茨城キリスト教大学・看護学部・助教

研究者番号：００５８６１８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円、（間接経費）　　990,000円

研究成果の概要（和文）：第2子妊娠中の母親を対象とした第1子理解のための子育てクラスプログラムの有効性を検討した。ADDIEモデルによりプログラムを作成、第2子妊娠中の母親に対して妊娠期に2回の第2子を迎え入れるための介入を行い、参加群・非参加群の2群間を比較した。介入群に有意に増加した項目は“第1子は第2子を抱っこするという”“2人同時育児の肯定感”“2人同時育児のイメージ化ができている”“あかちゃんがえりは時間の経過と共になくなると思う”であった。子育てクラスは第1子の理解を高め、母親の育児意識に対しポジティブな影響を及ぼし、第1子と第2子の2人同時育児の適応を促すための介入プログラムとして有効である。

研究成果の概要（英文）：The research method involved performing a literature review and developing a nursing intervention program for mothers expecting their second child. Nursing intervention was then implemented for mothers during their second pregnancy. Two groups were established and compared. The results for mother's perception of their first child's state following the birth of the second child indicated a significant increase in interaction between siblings following intervention such as the first child hugging the second child. In terms of the awareness of raising the first child and subsequently raising the two children together after the second child's birth,mothers were better able to imagine raising the two children together and felt reassured that infantile regression would disappear with time.In conclusion, the devised nursing intervention program increased the understanding of the dynamics with the first child and had a positive impact on the mother's perception of parenting.

研究分野：　医歯薬

科研費の分科・細目：　看護学・生涯発達看護学・母性・女性看護学

キーワード：　第2子妊娠　育児クラス　看護介入プログラム　育児意識　育児支援　出産準備教育

１．研究開始当初の背景

一般に育児に対する戸惑いは初産婦に多いとされている。しかし、新たに家族成員の第２子を迎え入れる母親は、第１子の育児経験はあるものの、同時に２人を育てることは初めての経験であり、育児に対し戸惑いを感じる。

一方、第１子にとっては「きょうだい」ができるという新しい家族役割への適応過程を辿る変化を経験する。家族の発達段階においては、第１子が学童期前期の子どもを持つ家族の発達課題として、子どもが兄姉としての役割を取得できるように育て、事故や健康障害を予防すること、第１子のニーズを満たしながら、第２子のニーズを満たすこと、親役割と夫婦役割、親子関係（親の子離れ、子の親離れ）を調整することである。

これらのことから、新たな家族成員を迎え入れる家族が健全な家族機能の発達を促すためには、役割獲得の準備期である妊娠期からの支援が重要であるといえる。

日本における妊娠期の健康教育においては、経産婦に特化した子育てクラスプログラムは準備されていない。したがって、本研究において、新たに第２子を迎え入れる母親に対する子育てクラスプログラムを開発する必要がある。

２．研究の目的

本研究の目的は、第２子を迎え入れる母親に対する子育てクラスプログラムを考案し、その有効性を検討することである。

研究仮説として、第２子を迎え入れる母親に対する子育てクラス群が対象群より第２子を迎え入れる準備ができ、第１子と第２子の２人を同時に育児していくための知識や技術、態度が獲得され、育児に適応するとする。

３．研究の方法

本プログラムの方法論的枠組みとして、インストラクショナルデザイン（instructional design）教育設計の ADDIE モデルを選択する。ADDIE モデルは、分析（Analysis)、設計（Design)、開発（Development)、実施（Implementation)、評価（Evaluation）の要素で構成されている。

まず、第２子妊娠中の母親のニーズの分析（Analysis）を行った。第２子妊娠中の母親がどのような育児体験をしているかに着目し、これまでの先行研究より、第２子妊娠・出産・育児に対する意識や体験をレビューすることで、第２子を迎え入れる母親の支援ニーズを明らかにした。さらに、経産婦に関する支援の現状や方法をレビューし、子育てクラスの内容や方法を検討した。

次に、プログラム設計（Design）および開発（Develop）では、１）第２子を迎え入れる母親に対する子育てクラスプログラムの枠組みを作成した。２）子育てクラスの目標を設定し、３）子育てクラスの評価指標を作成した。４）第２子を迎え入れる母親に対する子育てクラスプログラムを作成した。

実施（Implement）は、第２子を迎え入れる母親に対する子育てクラスを実施した。

評価（Evaluate）として、第２子を迎え入れる子育てクラスプログラムの有効性の検討を行った。量的に評価する項目として、（１）母親から見た第 1 子の様子、（２）第１子の育児および第２子誕生後の２人同時の育児に対する意識、（３）子ども観尺度、（４）子育てクラス運営評価とした。質的に評価する項目として、（１）子育てクラスクラスに参加した意見および感想、（２）第１子の様子、（３）育児全般についてとした。評価方法は、介入前後とした。評価時期は、介入前である妊娠中と介入後である出産後１週間および１ヶ月とした。

研究デザインは第２子妊娠中の母親に対し、妊娠期に２回の第２子を迎え入れるための子育てクラスを行い，参加した母親を介入群（ｎ＝31)，参加しない母親を対象群（ｎ＝28）として設定し２群間を比較する準実験研究とした。研究期間は 2011 年 11 月～2012 年 11 月であった。

分析方法は、被験者内因子を時期（妊娠中・出産後 1 週間および１ヶ月)、被験者間因子を介入の有無とする二元配置分散分析を行った。

倫理的配慮として、依頼する施設に調査の趣旨・方法、倫理的配慮を説明して了解を得た。また、研究協力者には妊婦健康診査に来院した際に口頭および文書で説明した。その際、研究の趣旨と方法、研究協力は自由意志であること、研究協力を途中で中断しても不利益のないことを保障し、得られたデータを本研究以外に使用しないこと、研究結果を公表する際には匿名性を厳守することを説明した。回答された質問紙の提出をもって参加の同意が得られたものとした。なお、本研究は国際医療福祉大学大学院研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

４．研究成果

１）第２子妊娠中の母親のニーズの分析

15 文献レビューより、第２子妊娠中から出産および育児に関する母親の意識と体験は【生活の中心は第１子】であり、【第１子に対する育児への戸惑い】と【第１子と第２子の育児を同時に行うことへの戸惑い】を感じている一方、【第１子の育児経験を生かした第２子育児へのゆとり】を感じていた。父親や祖父母の支援に関しては、第１子と第２子の育児を担っていくにあたり【父親役割・実父母・近隣支援に対する期待】を持っていた。

第２子妊娠中から出産後の母親とその家族に対する子育てクラスは、第１子に対する理解を高めることであり、【第２子妊娠中から出産・育児を経験する母親の特徴理解】【兄姉になる第１子の特徴と接し方の理解】【第

１子が第２子を迎え入れる準備と育児への巻き込み】【父親・実父母・義父母に対する育児への巻き込み】の必要性が抽出された。

子育てクラス時期や期間は【妊娠中から育児期にかけて継続的な支援】であり、【クラス運営と面接を組み合わせた支援】が必要であることが明らかになった。

２）プログラム設計および開発

子育てクラスの目的は、第１子と第２子の２人同時の育児へ適応することができることである。目標は、（１）第２子妊娠中から出産・育児を経験する母親の特徴が理解できる。（２）第２子を迎え入れる第１子の感情が理解できる。（３）第１子の特徴を踏まえた育児が実践できる。（４）妊娠中から第１子がきょうだいを迎え入れる準備の必要性を理解し行動できる。（５）父親・実父母・義父母が育児に対して協力できる。とした。

子育てクラスの内容は、（１）第２子妊娠中から出産・育児を経験する母親の特徴理解、（２）兄姉になる第１子の特徴と接し方の理解、（３）第１子が第２子を迎え入れる準備と育児への巻き込み、（４）父親・実父母・義父母の育児参加の促進、とした。

子育てクラスの実施時期は、妊娠中期と妊娠後期の２回とし、１回６０分の集団教育とした。実施方法は、知識・スキルの伝達として講義および態度変容の支援としてディスカッションを導入した。その際、ディスカッションは母性領域の専門家がファシリテータとなり、参加者間で情報を交換できるように働きかけた。集団教育の終盤には参加体験を振り返る時間を設けた。

子育てクラスに用いた媒体は、子育てクラスの内容に関する説明としてパンフレットを作成した。また、第１子が第２子の誕生について理解を促すための教材として、独自に作成した絵本を用いた。実施時の留意点として、母親および第１子を含めた家族が参加できるよう週末に設定し、母親同士のディスカッションの際には集中できるよう託児要員を確保した。

３）第２子妊娠中の母親に対する第１子理解のための子育てクラスの実施と評価

（１）対象者の概要：研究の参加に同意した者は７７名であった。７７名中、１回のみのクラス参加や、アンケートの回収が妊娠期のみ、出産後１週間のみの回収であった場合を除いた結果、有効回答数は５９名（７６.６％）であった。介入群３９名中有効回答３１名（７９.５％）、対象群３８名中有効回答は２８名（７３.７％）の回収率であった。

子育てクラスは、前期クラスと後期クラス１回を合わせて１クールとし、１３クール実施した。１回のクラスへの参加人数は母子とその家族を含め延べ人数１３６名であった。最高１４名、最低２名、平均６名の参加であった。夫の参加が述べ１６名、実父母が６名の参加であった。

子育てクラスを実施した結果、介入群に有意に増加した項目は、“２人同時の育児に対する肯定感”（$p<0.05$）、“２人同時の育児がイメージできている”（$p<0.05$）、“あかちゃんがえりは時間の経過と共になくなると思う”（$p<0.05$）など、２人を同時に育てていくことに関する肯定的な意識の変数であった。

一方、介入群に有意に低下した項目は、“２人同時の育児に対する負担感”（$p<0.05$）、“第１子への愛情が半分になってしまうのではと心配”（$p<0.01$）、“第１子の要求に対して忙しいから後でねと拒否しがち”（$p<0.05$）、“第２子の妊娠および誕生で行動が制限されるようになった”（$p<0.05$）、“気持ちを休めることができない”（$p<0.05$）など、２人を同時に育てていくことに関する否定的な意識の変数であった。

妊娠中・出産後１週間、出産後１ヶ月における自由記載について育児に関する内容をコード化し質的帰納的に分析したコードを＜　＞で示す。出産後１週間の自由記載によると、子育てクラスについては＜子育てクラスはあったほうがいい＞＜子育てクラスへの参加で気持が楽になった＞＜第１子の関わり方が分かり助かった＞＜第１子があかちゃんを迎える姉としての学びがあったと思う＞＜絵本はまだ早すぎる＞＜第１子が絵本に興味を持った＞＜父親や祖父母も巻き込める内容になっているとさらに良かった＞であった。

第１子の様子については＜第１子がききわけのない振る舞いをする＞＜第２子誕生時に第１子の成長する姿を見ることができた＞であった。育児全般については＜体力的に大変＞＜きょうだいの姿を見るととても幸せ＞であった。

出産後１ヶ月の自由記載によると、子育てクラスについて＜第１子が絵本に興味を持った＞＜絵本はまだ早すぎる＞＜出産後も育児クラスを開催してほしい＞、第１子の様子について＜第１子は兄姉らしくなった＞＜第１子は我慢する＞、育児全般については＜第１子の育児に戸惑う＞＜経産婦の母親への支援を望む＞＜夫・実父母・義父母に協力してもらいたい＞であった。

子育てクラスのプログラム内容は第２子を迎え入れる母親に対する内容である。しかし、２人同時の育児に適応していくためには、母親と第１子を取り巻く家族の支援が欠かせない。そのため、夫や実父母・義父母の参加があったことは、家族に対しても、【第２子妊娠中から出産・育児を経験する母親の特徴理解】【兄姉になる第１子の特徴と接し方の理解】【第１子が第２子を迎え入れる準備と育児への巻き込み】に対する知識の提供の場になったと考えられる。また、【父親・祖父母に対する育児参加の促進】の認識に働きかけるきっかけの場になり、２人同時の育児

に適応する為の支援を得る機会であったと考えられる。

子育てクラスの参加群に、“第１子は第２子を抱っこするという”に有意に増加した。これは第１子が産まれてくる第２子に関心を示し、兄姉になる意識に影響を及ぼしたことを意味する。その理由として、本研究における介入プログラムの目標に、第１子の特徴を踏まえた育児が実践できること、妊娠中から第１子がきょうだいを迎え入れる準備の必要性を理解し行動できることが挙げられている。第１子がきょうだいを迎える上でも妊娠中からの準備が示唆されている。本研究で考案したプログラムの中に第１子の理解を高めるために【第１子が第２子を迎え入れる準備と育児への巻き込み】に関する内容が盛り込まれている。また、媒体には、第１子が興味・関心を持つことができるように絵本を用いた。絵本の中には、誕生した弟妹に対する第１子の関わり方についての記述がある。母親は第１子に対し妊娠中から、第２子を迎える準備に絵本を用い、日々の育児の中で【兄姉になる第１子の特徴】を理解しながら、きょうだいを受け入れる準備を整え、出産を迎えたのではないかと考えられる。本介入プログラムの効果は一部支持された。

本研究で考案した子育てクラスプログラムは、妊娠中は第２子を迎え入れる準備期間として重要と捉え、予期的に介入していく必要性を認識したうえでの介入であった。妊娠中から第２子を迎え入れる準備に関する介入により、子育てクラスに参加した母親の育児意識に対し、ポジティブに影響を及ぼしたと言える。

第２子を迎え入れる母親に対する子育てクラスの目的は、第２子を迎え入れる第１子の感情が理解できる、第１子の特徴を踏まえた育児が実践できる、妊娠中から第１子がきょうだいを迎え入れる準備の必要性を理解し行動できるがある。第１子の理解を高めることが大きな狙いである。内容として、幼児期、特に自我意識が芽生え発達していく３歳ころの第１反抗期が目立つ時期および、他人から褒められることによって自我を確認しようとする欲求が出現する時期であることを説明したこと、第１子に対する関わり方について知識を得ることにより、効果をもたらすことができたのではないかと考える。先行研究では、【兄姉になる第１子の特徴と接し方の理解】についての必要性を述べているが、提案や推論でしかなかった。本研究において、【兄姉になる第１子の特徴と接し方の理解】を促す介入をすることで効果が得られたことに大きな意義がある。

中でも、アウトカムとして最も重視していた項目が、“２人同時の育児のイメージ化ができている”、“２人同時の育児の肯定感”“２人同時の育児の負担感”である。これらの項目は介入効果が認められた。本研究における第１子の理解を高める子育てクラスは今後、一定の効果のある第１子の理解を高める育児クラスとして、臨床実践可能性を示唆したと言える。

第２子妊娠中に経産婦を対象とした育児クラスの必要性については、介入群に有意に増加した。これは、介入群の母親がプログラム内容にいて意義を感じており、必要性を認識した結果であると言える。このことからも本研究における第１子の理解を高める子育てクラスのニーズについては支持されたと言える。

本研究における第子を迎え入れる母親に対する子育てクラスプログラムは、第１子に対する理解を高め、母親の育児意識に対し肯定的な影響を及ぼし、第１子と第２子の２人同時の育児へ適応の目的が達成され、有効性が検証された。妊娠期の介入のみならず、出産後育児期にかけて継続的支援を行うことが２人同時の育児適応への更なる強化には必要である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者および連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①<u>礒山あけみ</u>：第２子妊娠中の母親の育児意識－母親の特性および育児支援との関連、母性衛生 2014．７月（査読有）

②<u>礒山あけみ</u>：第２子を迎え入れる母親に対する看護介入プログラムの検討、日本母性看護学会誌 vol.13,No.1 33-41，2013（査読有）

〔学会発表〕（計２件）

①<u>礒山あけみ</u>：第２子妊娠中の母親の育児意識－母親の属性・特性および育児支援との関連，第 27 回日本助産学会学術集会，2013.5，金沢.

②<u>礒山あけみ：</u>第２子を迎え入れるための介入プログラムの検討第 52 回日本母性衛生学会学術集会 VOL.3　NO．１，2011.9，京都.

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

礒山あけみ（ISOYAMA AKEMI）
茨城キリスト教大学・看護学部・講師
研究者番号：00586183

(２)研究分担者
坂間伊津美（SAKAMA IZUMI）
茨城キリスト教大学・看護学部・教授
研究者番号：40285052

(3)連携研究者
衣川さえ子（KINUGAWA　SAEKO）
国際医療福祉大学・保健医療学部・教授
研究者番号：90538297